



TITLE:

<批評・紹介> 三上義夫著「數學」

AUTHOR(S):

藪内, 清

CITATION:

藪内, 清. <批評・紹介> 三上義夫著「數學」. 東洋史研究 1937, 2(3): 274-275

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138727>

RIGHT:

數 學

三 上 義 夫 著

著者は夙に和算の研究に没頭し、遠藤利貞氏の遺稿を整理し増修日本數學史を完成した人である。和算の研究上、其の母體たる支那數學を知る必要に迫られ、此の方面に於ても既に數多の論文を發表され、一貫した支那數學史をも略説されてゐる。即ち略史としては英文の和漢數學發達史（大正三年刊）を初めとして、支那數學の特色（東洋學報第十五、六卷）及び東西數學史（共立社執近高等數學講座）等であつて、茲に又一書を加へた。此の新著は其の卷末に示された如く、前著に比し内容的には別に新しいものでなく、紙數に制限を受けた爲に術法等の説明は極めて簡略になつてゐる。従つて數學拔きで支那數學の概略を知らうとする一般人に對しては甚だ簡便な好著である。著者に從へば支那數學の著しい特質は、計算に策（和算では算木と呼ぶ）を用ひた事で、此れが爲に負數、開平、開立、高次方程式等が外國に比し早く先鞭された。出發の早かつた支那の數學が順調に發達しなかつた最大の原因は偏した古典尊重の精神である。支那數學の發展は概して西方との交渉の盛な時代に屬してゐるにも拘らず、其の影響は受けてゐない。例へば唐代にアラビヤ數字に依る筆算が輸入されたが、依然として算木に

よる古算法を墨守してゐた。此等の事は支那には數學の專家が少なく經學の士が經典研究の必要上、それを論じた場合が多い事に基因してゐると思はれる。支那數學が順調に發達しなかつた事を以て、支那人の數學的能力を否定するのは早計で、元初に於ける斯學の進歩は彼等の才能を充分に裏書してゐる。

尙和算に關しては成城高等學校教授の細井淙氏が執筆されてゐる。一讀に値する。

(藪 内 清)